

## 二つの国際環境会議

宇沢 弘文

環境問題はこの25年ほどの期間に、その基本的性格について大きな変化が見られる。それは、国連の主催によって開かれた2つの環境問題に関する国際会議のAgendaに象徴されている。第一は1972年、スウェーデンのストックホルムで開かれた第一回の環境問題に関する国際会議で、第二は1992年、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開かれた第三回の環境問題に関する国際会議である。

第一のストックホルム環境会議における主要なAgendaは、1950年代の半ば頃から1960年代を通じて極端な形で押し進められた工業化と都市化によって引き起こされた公害、環境破壊であった。それは酸化硫黄物、二酸化窒素、有機水銀などそれ自身有毒な化学物質が産業活動によって排出され、直接自然環境を汚染、破壊し、人々の健康を傷つけ、ときとしては生命を奪うものであった。ストックホルム環境会議のAgendaを象徴したのは、日本から参加した重症の水俣病患者の方々であった。

これに対して、第二回のリオ・デ・ジャネイロ環境会議における主要なAgendaは、地球温暖化、生物種の多様性の喪失、海洋の汚染、砂漠化の進行、et c . に関する問題である。それは地球温暖化の問題に象徴されるように、二酸化炭素など、それ自体は無害な（場合によっては、むしろ有益な）化学物質が産業活動、都市活動によって大量に排出され、全体として膨大な量となって地球的規模における自然環境の均衡を攪乱し、人類だけでなく、地球上の全生物の存在に対して深刻な影響を及ぼすような規模になってきたことに関わるものである。

もちろん、第一のストックホルム環境会議における主要なAgendaであった工業化と都市化によって引き起こされた公害、環境破壊の問題は解決されたわけではない。しかし、日本を含めて世界の多くの国々で、1950年代の工業化と都市化によって引き起こさ

れた公害、環境破壊の問題があまりにも悲惨な被害をもたらし、しかも広範囲にわたっていたため、大きな社会的、政治的問題となり、政府、民間の企業ともに、公害防止、環境保全について、積極的な政策を打ち出さざるを得ないような状況に追い込まれていった。また、このような公害、環境破壊の問題はもっぱら局所的、地域的に限定されていた。これらの問題に対する政策的な手段は基本的には、個別的な企業に対する直接的な規制あるいは各地域毎の総量規制の形をとるのが効果的であり、また経済学的な観点からも望ましいこともあって、全体としてみたときに、ストックホルム環境会議における主要なAgendaであった環境問題については、解決の方向に進めつつあるといってもよいであろう。

それに反して、第三回のリオ・デ・ジャネイロ環境会議における主要なAgendaであった地球温暖化、生物種の多様性の喪失、海洋の汚染、砂漠化の進行、etc.、に関する問題は、第一のストックホルム環境会議における主要なAgendaに比べて、本質的に性格の異なるものであって、理論的にも、政策的にもはるかに困難な問題を提起している。上に述べたように、これらの問題がいずれも、それ自体無害ないし無毒な化学物質が原因であるが、地球的規模において、自然環境の均衡を乱し、そのエコロジカルな条件に不可逆的な影響を及ぼしているからである。しかも、これらの問題はもっぱら、「ゆたかな」国々の経済活動によって引き起こされ、その被害を直接受けるのは「まずしい」国々である。さらに、現在の世代が、その「ゆたかさ」を維持するためにこれらの問題が引き起こされ、その被害を受けるのはもっぱら将来の世代である。このように第三回のリオ・デ・ジャネイロ環境会議で提起された地球環境問題は、これまで経済学の中心的テーマであった効率に関わる問題を超えて、異なる国々の間、あるいは異なる世代の間の分配に関わり、本質的に困難な問題を提起するものとなっている。